「歐陽詹」事件から見た「鶯鶯傳」の新解釋

——中唐の「尤物論」を巡って——

諸田龍美

一　はじめに

中唐は復興と革新の時代である。安史の亂から半世紀を經たこの時代、王朝の再興を賭した様々な試みがなされ、文藝の世界に於いても、元稹白居易の新樂府運動、韓愈柳宗元の古文復興運動など、「復古」に名を借りた革新運動がめざましい展開をみせた。ルネサンスは西洋の人閒觀に根本的な轉換を齎したともされているが、文學作品を閲する限り、中唐期にも同じような人閒觀の捉えかえしが行われたように思われる。恐らくはそのことと密接な關係を持つのであろう、この時代には、長く後世の文學的源泉で在り續けた、言わば「根源的作品」が生まれている。白居易「長恨歌」、元稹「鶯鶯傳」がそれである。[1] 貞元末期から元和初というほぼ同時期に創作された二作品が、共に「根源的作品」となり得た條件を問うてみることは、文學研究の課題として相應しい奥行きを持つであろう。拙論は「歐陽詹」事件という新たな光源によって、今まで必ずしも明確にされていない「鶯鶯傳」の隱れた「本質」に、光を當てようと試みたものである。

二　先行研究の概括

まず、從來の「鶯鶯傳」研究を概括しておきたい。研究史上問題とされてきたのは主に以下の諸點であった。①鶯鶯は妓女か。②張生は作者元稹の假託か。③張生が鶯鶯を捨てた原因とその倫理的評價。④主題及び創作動機。

この内①については、今日それを否定するのがほぼ通説となっている。②はこれを俎上に乘せる研究が截然と見解を分かつ難問であるが、それだけに、無批判に張生を元稹と重ねて論ずることはできにくくなっていよう。[2] ③及び④は「鶯鶯傳」の評價にかかわる重要な爭點である。

③の張崔「＝鶯鶯」の離別に關して、中國では以下のような見解が提出されて來た。[3] a當時の門閥制度のもとでは寒門出の鶯鶯は捨てらざるを得なかった。b鶯鶯は名門出とは言え沒落貴族であったため仕官を熱望する張生としては離別せざるを得なかった。c情感と禮教との矛盾衝突が齎した。d張生の女性蔑視に因る。e鶯鶯こそが孤閨を守ることに耐え切れず決別を求めた、等である。これらの觀點は何れもそれなりの說得力を持とう。

かように多くの研究者をして離別の原因を様々に考究させた動因は、その大半が、離別に際して張生が友に向けて開陳した「尤物論」（美人を、人を惑わす妖孽［＝災いの種］とする見方）の齎す大きな衝撃にあったと言える。この衝撃を如何に意味附けるか、就中その倫理的評価を如何に下すべきかに、研究者は腐心し續けてきた。張崔離別の原因とその倫理的評價は、一連の研究課題と見なされてきたのである。

張生の「尤物論」を巡る從來の倫理的評價は、概ね三つの類型に大別できよう。A張生元稹を共に糾彈する立場（糾彈派）、B張生元稹を共に擁護する立場（擁護派）、C張生を糾彈し元稹を擁護する立場（糾張擁元派）、の三つである。

A（糾彈派）は歴來最も有力な見方で、早く明の馮夢龍撰とされる『情史類略』（巻十四情仇類）などもこれに與する。張生（元稹）の薄情・女性蔑視・身勝手等を詰り、鶯鶯（の造形）を高く評價するのが特徴である。こうした見方は現代でも根強く支持されている。[4] B（擁護派）は仕官を熱望していた張生（元稹）と没落貴族（或いは妓女）出の鶯鶯との身分差を當時の常識に於いて考慮すれば、一概に張生（元稹）を非難できないとするものである。積極的な擁護論ではないが、結果として、張生（元稹）に一定の理解を示す。[5] C（糾張擁元派）には概ね二種の類型がある。共に張生の行爲を非難しつつも、一つは、そこに封建思想の害悪を暴露せんとする作者元稹の意圖を讀み取るべきだとし、[6] 今一つは、元稹の若い士大夫に向けた訓戒の意圖を重視すべきだと言う。[7] 作者の意圖に關するこの二種の解釋は、そのまま先の④創作動機の二種の解釋ともなる。創作動機の解釋には他に、「行卷」に用いるためとの説、[8] 鶯鶯に對する盡きせぬ愛情に動かされてとの説[9]などがある。

こうした研究の概觀から歸納できる最大の特徴は次の點であろう。即ち、從來の「鶯鶯傳」研究は、張生の行爲及びその「尤物論」に對して如何なる倫理的評價を下すべきか、との問題意識を中心として積み上げられてきたという點である。より具體的には、張生の「尤物論」や元稹の言う若い士大夫への訓戒として創作したとの説明を如何に受け取るか、この點に、論者の立場は典型的に現れた。今その極をのみ取り擧げれば、「尤物論」に強い悪を見るか、やむを得ぬと見るか、「訓戒の辯」を「建前」と取るか、「本音」と取るか、この二極に整理できよう。就中、張生の「尤物論」は如何程の悪なりやとの設問が、倫理的評價の核心に存在したのである。「鶯鶯傳」研究の在り方をこうした方向に強く規定してきた大きな要因として、魯迅が下した「惟だ篇末に過ちを文（かざ）り非を飾りて、遂に悪趣に墮つ」（『中國小説史略』第九篇唐之傳奇文下）との標語が根強く影響してきたことも事實であろう。

さて、以上の考察を踏まえた上で、拙論が何を課題とするものであるかを述べておきたい。拙論が問うのは次の二點、即ち①元稹の「訓戒の辯」は「建前」か「本音」か。②「鶯鶯傳」が摑んでいる本質とは何か、である。つまり從來の研究に於いて主流であった、張生の「尤物論」に倫理的な評價を下す試みは敢えて差し控えたい。何故か。思うに、張生の「尤物論」を倫理的な觀點から位置附けようとする試みは、要するに作品を善悪の二元論によって捉えようとする試みであり、無意味なことではないにしても、善悪の絶對的な基準など立てられない以上、原理的には背理に終わるしかない問いであると考えるからだ。多く「善悪を問う」てきた從來の「問い」の在り方を、その

「本質を問う」方向に改めるべきだと思うのである。その意味で、小南一郎氏が「(『鶯鶯傳』の)本質は、作中の鶯鶯の手紙に典型的に表明されているように、そうした士大夫階層の非人閒的な論理に深い悲しみの目を向けるところにあったのである」[10]と述べておられるのは、「本質を問う」た試みとして高く評價されるべきであろう。拙論は小南氏の所說と必ずしも結論を一にしないが、同じく「本質を問う」試論の一つとして提出するものである。そのための前提として、次章以下では先ず、元稹の「訓戒の辯」が「建前論」に過ぎぬものか否かを檢討しておきたい。

三　「訓戒の辯」は「建前」か

「鶯鶯傳」の末尾で作者元稹は自らを登場させて、かく述べる。「予嘗て朋會の中に於て、往往此の意に及ぶは、夫の知る者をして爲さず、之を爲すものをして惑はざらしめんとてなり」[11]と。卽ち、自分がしばしば張崔のことに言及してきたのは、戀の怖さを知った者が戀をしないように、すでに戀に陷っているものがその戀に惑わないようにと考えたからである、と言うのだ。恰もここで自ら「鶯鶯傳」の創作意圖を明かしているかのようである。「鶯鶯傳」を書いたのは若い士大夫に向けた戀の訓戒としてであったと言うこの「訓戒の辯」を巡って、論者の見解は多樣であろう。理解の便宜上これを二極に整理しておく。一つは、創作意圖を正直に吐露した「本音」であると見る立場であり、今一つは、「建前」を述べているにすぎないと見る立場である。「訓戒の辯」を「本音」と見る論者は、例えば內山知也氏(「この一文でも彼の『鶯鶯傳』著作の意圖は受驗生に對する訓誡であることが明らかである」[注(2)引用論文])や富永一登氏(「(訓戒の辯によって)張生が鶯鶯を棄てたことを評價し、後人への戒めとしてこの話を語っていたことがわかる」[12])などである。一方、强力にこれを「建前」だと主張する論者は稀なのだが、實は、張生の「尤物論」を「建前」だとする論者は、ほぼ元稹の「訓戒の辯」をも「建前」と見なす論調であり、この見解を支持する者は潛在的にはかなり多いと推察される。確かに唐代傳奇には、史書に習う體裁作りのため、末尾にこの類いの言わば「附錄」を附ける場合も多く、「建前」說を支持する有力な根據も存在するわけである[13]。ならば、「本音」「建前」何れの說に與するべきか。拙論では同時代の資料と比較することによってこの問題を檢討してみたい。

『太平廣記』(卷二七四・情感)に「歐陽詹」と題する故事がある。同じ中唐期に成る傳奇小說に比べれば知名度の低い逸話であり、作品研究も稀なのだが、筆者は、「鶯鶯傳」の創作意圖や本質を檢討する上で忽視できぬ資料の一つであると考えている。

「歐陽詹」故事(以下「故事」と略稱)は、二つの部分に大別できる。一つは、晚唐の黃璞が記した部分であり、今一つは、中唐の孟簡による部分(「詩序」及び「詩」)である[14]。『太平廣記』はこの兩部を共に「(黃璞の)『閩川名士傳』に出づ」とするが、後に考察するように、黃璞所記部は誤聞や脚色を含み、信憑性に疑問が殘る。從って、ここでは孟簡の記述(「詩序」)に依り「故事」の梗概を紹介しておく[15]。

歐陽詹は、科擧合格後四門助敎となり、貞元十五年、宰相に(不次の拔擢を求めて)上書したことがあった。その書は優れていたが、折惡しく反亂が勃發し顧みられなかった。待ち侘びた詹は太原に遊び、再び歸京した後、死去したのである。彼が淸貧に甘んじたのは、名敎に忠實であったから。まじめで音樂や女性の

樂しみも識らなかった。初めて仕官することになっても、未だに女色や美女が男を惑わす害悪であることを知らなかったのである。太原に行き大將軍の宴に侍った折り、そこに美しい妓女がいた。詹はこれに惚れ込み、幾月か太原に留まって妓女を溺愛する。やがて詹が歸京しようとした折り、妓女は同行を願った。詹は世間體を考え、長安に戻った後迎えを寄越す約束で、太原を立ち去ったのである。ところが、歸京後思ったように事は運ばず、とうとう約束の期限を過ごしてしまう。その頃、妓女は長い間待ち侘びた心勞から病氣になり、重體に陷っていた。死を間近に控えたある夜、彼女は黑髮を切り、召使いに贈り物として詹に渡すよう遺託する。妓女の死後、詹の使いは太原を訪ね、黑髮を手にして都へと歸り、髮を詹に手渡した。詹はあまりのことに悲しみ悔やみ、十日程も生死の境を彷徨った揚げ句、死んでしまったのである。

この話の主人公は韓愈が「何蕃の書」のなかで觸れている、あの「歐陽生」その人である。嗚呼、男女の情愛に一途になってしまうと死を招く結果にまで至るものなのだ。（歐陽詹の話でも）そのことははっきりしている。大體において、適當な時期に女性との交際を斷ち切っておけば、美人に惑わされることもないのである。どうして歐陽詹のように身の破滅を招くことなどあろうか。（原文は續けて歌行體の「詩」を載せる。）

さて、ここに紹介した「故事」は、國子監四門助教と妓女との「情死」という、儒教倫理からはとうてい容認し難い「スキャンダル」記事であるためか、ことの眞僞を巡り甲論乙駁を繰り返してきた。しかし、近年の幾つかの研究により、「故事」は、孟簡所記部（「詩序」と「詩」）に關する限り、基本的に史實と見なせることが、ほぼ證明されている。[16] 更に「故事」の孟簡所記部が史實と確定できることによって、逆に黃璞所記部の虛構性も明らかになった。なぜなら、孟簡所記部で①四門助教になった後②太原に遊んだ、とされている順序が、黃璞所記部では逆轉しているからである。[17] 黃璞所記部はやはり「小說的な虛構（ものがたりめいた）」（後掲植木論文）があるのであろう。

歐陽詹の履歷については、最近、植木久行氏によって、從來の研究成果を踏まえた極めて詳細な考證がなされている。[18] 植木氏によれば、歐陽詹は肅宗の乾元元年（七五八）に生まれ、德宗の貞元十七年（八〇一）冬に卒した可能性が最も高い。だとすれば享年四十四歲。その太原行きは貞元十六年で、しかも十月以前のことであった。一方、翌貞元十七年八月十五日以降まで彼が太原に滯在していたことは確實である。從って最短でも十ヵ月以上を太原で過ごしていたことになる。この間に、先の妓女と出會い、これを溺愛したのだ。孟簡「序」によれば、この時に結ばれた深い愛情が、二人を死に至らしめたのである。ほぼ貞元十七年冬に起きたこの事件は、孟簡らを深く悲しませた。「序」に云う「河南の穆道玄予を訪ね、常に其の事を嘆息せり。……暇日、偶ま詩を作り以て之に繼ぐ」と。この口吻からすれば、孟簡の「詩」及びその「序」は、歐陽詹の死から間も無い、まだその印象も鮮烈な内に書き記された作品であろう。「序」が「何蕃書」（卷二）[19] にのみ言及し、歐陽詹の死後程なく書かれたと思われる、同じ韓愈の「歐陽生哀辭」（卷五）に觸れない點も、そのことを傍證しよう。孟簡と歐陽詹、その具體的な交友の姿を彼らの作品中に求めることはできない。しかし、孟簡は歐陽詹に先立つこと一年、貞元七年に科擧に及第し、[20] 同年の進士には閩出身の林蘓がいた。[21] 歐陽詹とは同鄕の知己であった

この林藻を介して、孟簡は歐陽詹を知ったのであろう。だとすれば歐陽詹の死去は、孟簡にとって、十年來の友人を失ったことを意味した。從って、彼は衷心から、これを悼んだのである。その深い慨嘆は、先の「序」に續けた「詩」の詠風からも、十分に讀み取ることができよう。[22]

貞元十六年冬以前に太原に遊び、同十七年仲秋すぎまで彼の地で過ごした歐陽詹は、この間に妓女と知り合い、戀に落ちた。同年冬單身歸京した彼は、共に暮らす將來を約した女の死を知り、後を追うかのように他界したのである。今ではほぼ忘れられているこの情死事件は、以下の年譜に見るように、實に、「鶯鶯傳」の戀と同じ時期の出來事であった。

歐陽詹・元稹・張生の對照年譜

○至德三載戊戌（乾元元年）（758）
　歐陽詹生？

○大曆十四年己未（779）
　元稹生。

○貞元八年壬申（792）
［詹］登進士第、與韓愈同年。歸泉州。

○貞元九年癸酉（793）
［元］登明經科。

○貞元十年甲戌（794）
［詹］向長安。
［元］～十一年、夢遊春之戀？[23]

○貞元十五年己卯（799）
［詹］九月以前、授四門助教。秋冬、與韓愈做轉職活動。「上鄭相公書」。
［張］遊蒲州普救寺。

○貞元十六年庚辰（800）
［張］二月、與崔氏相愛。後、之長安、數月復遊於蒲。又之長安。
［詹］十月以前、遊太原。與妓相識？

○貞元十七年辛巳（801）
［張］科擧落第。止於長安、贈書於崔。春、崔返書於張生。
［元］賦「續會眞詩三十韻」
［張］斷絶對崔之愛情。「尤物論」。
［詹］於太原與妓女相愛。冬、返長安死去？

○貞元十八年壬午（802）
［韓愈］「歐陽生哀辭」［孟簡］「歐陽詹」故事
　※春、李紳已與韓愈相識。
［張］崔委身於人、張有所娶。與崔完全決絶。
［元］「時人多許張爲是善補過者。…（元稹）於朋會之中、往往及此意。」
　（九月、撰『鶯鶯傳』？孫・吳説）[24]

○貞元十九年癸未（803）
［元］三月、登書判拔萃科、爲秘書省校書郎。與白居易相識。娶韋叢。

○貞元二十年甲申（804）
［元］九月、撰『鶯鶯傳』？（卞説）[25]

年譜を一見して明らかなように、歐陽詹と妓女との戀は、「鶯鶯傳」の戀と全く同時期に展開されたものである。「鶯鶯傳」の戀が假に極めて虛構性の高いものであったにせよ、その執筆時期はほぼ貞元十八年から同二十年の間に比定されている。從って、歐陽詹と妓女との戀愛事件は勿論、孟簡によるその作品化も、元稹の「鶯鶯傳」執筆より

先立つことはほぼ確実であると見てよい。つまりそれらは、「鶯鶯傳」に影響を與え得た同時代の事件・作品として、貴重な價値を持つわけである。では、元稹は「鶯鶯傳」執筆の際、歐陽詹事件と孟簡の作品とをどの程度意識していたであろうか。

「鶯鶯傳」に據れば、歐陽詹が長安で死去した當時、張生と元稹は共に長安に滯在していた。つまり、時空の點では、元稹が事件を知っていても不思議はないのである。

また、歐陽詹の知名度も確認して置くべきポイントであろう。これに關しては次の資料がある。韓愈「歐陽生哀辭」(卷五)に「建中貞元の閒、余[=韓愈]江南に就食し、……往往詹の名を閭巷の閒に聞けり。詹の江南に稱せらるるや久しきなり。貞元三年、余始めて京師に至り進士に擧げられ、詹の名を聞くこと尤も甚し。……詹未だ位を得ずと雖も、其の名聲は人人に流れ、其の德行は朋友に信ぜらる」と言う。また、唐・李貽孫の『歐陽行周文集』序にも「常(衮)公の知(により)……君の聲、漸く江淮に騰し、已に京師に達す。……尋いで陸相贊知貢擧たりて、天下の文章を搜羅し、士を得るの盛んなること、前に倫に比すべき無し。故に君の名榜中に在り。常に君と道を同じくして相上下する者、韓侍郎愈・李校書觀有り。君と並べて百歲傑出の人に數へらる。今に到るまで之に伏せり」と。更に『新唐書』(歐陽詹本傳・卷一〇三)には「進士に擧げられ、韓愈・李觀・李絳・崔羣・王涯・馮宿・庾承宣と聯第せり。皆天下の選、時に『龍虎榜』と稱せらる」と述べる。これらによれば、歐陽詹は科擧及第の五年も前からある程度名も知られ、登科の折りには格別な評判も立ったようだ。中には韓愈と並べて百年に一度の英才とまで評するむきもあったらしい。『四庫全書總目提要』が述べるように[26]、それは褒め過ぎであるにせよ、當時は一定の知名度を有した人物であったと考えてよかろう。

一方、當時の時代風潮の内にもこうしたセンセーショナルな事件の傳播を促す、ある種の熱氣が醸成されていた。卽ち、中唐期には若い士大夫の閒に戀愛を主題とする「語りの場」が形成されており、それが、この時期に「鶯鶯傳」「長恨歌傳」「李娃傳」などの戀愛小說が集中的に製作された基盤ともなっていたのである[27]。そうした「語りの場」が最も活況を呈していたのは、外ならぬ貞元末期から元和にかけての時期であった。こうした時代風潮の中で、「鶯鶯傳」の作者である元稹が歐陽詹事件に關心を持たなかったとは考えにくい。事實、『元稹集』には、「崔徽歌序」(外集卷七)と題する次のような作品が採錄されている。

崔徽は、河中府の娼なり。裴敬中與元の幕たるを以て蒲州に使ひし、徽と相從ふこと累月、敬中便ち還らんとす。崔は從ふを得ざるを以て恨みと爲し、因って疾を成せり。丘夏あり、善く人形を寫す。徽寫眞を托し敬中に寄せて曰く「崔徽一旦晝中の人に及ばず、且に郎の爲に死せんとす」と。發狂して卒せり。

ごくおおまかな記述ではあるが、歐陽詹事件に類似すること、明らかである。元稹はこうした話柄に興味を抱く人物であった。

さらに、歐陽詹と元稹との接點を追って行くと、以下のような興味深い資料が見つかる。『歐陽行周文集』に「蜀門にて林蘊と路を分かちて後、屢ば山川の閒中に似たる有り。因って林蘊に寄す。蘊も亦た閒人なり」(卷二)、「林蘊と同じく蜀に之く途次、嘉陵江にて越鳥の聲を認め得、林に呈す。林も亦た閒中の人なり」(卷三)、「韋晤の宅にて歌を聽く」(卷三)と題する詩があり。一方、『元稹集』にも「林復夢

（蘊）の韋令の辟に赴くを送る」（巻十四）、「復夢の韋令の幕に赴くを送る」（巻十六）の二作品が現存するのである。これらの資料により判明するのは以下の事柄である。つまり、時期は不明なのだが、歐陽詹は同じ閩の林蘊が韋晤[28]の幕に辟召されて行くのに同道して蜀へと旅立ったことがあり、長安で催された送別の宴席で、元稹はこの一行を見送っているということである。元稹はこの時、歐陽詹の姿を目の當たりにしたであろう。或いは親しく話を交わしていたかも知れない。従って、歐陽詹事件が起こった際に、元稹がそのことに人並み以上の關心を抱いたとしても、不思議はないのである。

また、晩唐・范攄の『雲溪友議』（巻上・南海非）には、房千里が妾の趙氏を失った様子を形容して「幾ど歐陽四門詹の太原の喪有り」と述べ、自注に「歐陽太原にて姫を亡ひし事、孟簡尚書已に詩に序して之を述ぶる有り」と記す。この時代に歐陽詹事件が一定の流布をみていたことを示す資料であろう。

さて、ここまで幾つかの資料を狀況證據的に列擧し、「鶯鶯傳」執筆の際に、歐陽詹事件と孟簡「故事」とがどの程度意識されていたかを檢討して來た。ここまでの段階でほぼ確言し得るのは以下の點である。先ず、確定的證據こそないものの、「鶯鶯傳」執筆の際、元稹はほぼ確實に歐陽詹事件を知っており、しかも、それをかなり身近な出來事として受け止めていたであろうということ。從って、これを扱った孟簡の作品は、「鶯鶯傳」の同時代資料として見過ごせぬ價値を持つということである。中唐期の時代精神に立ち返って「鶯鶯傳」を受け止めようとする際には、孟簡の「故事」は、缺かせない資料なのである。しかし、この角度からの研究は今までほとんど試みられていない。[29]

因に、程毅中氏に次のような指摘がある。

太原の妓の詩に「自從別後減容光、半是思郎半恨郎」の句が有る。「鶯鶯傳」中の「自從消瘦減容光」の詩は、恐らくはここから採られたものであろう。[30]

太原の妓女が歐陽詹に寄せたとされる詩中の句が、「鶯鶯傳」で崔氏が張生に與えた詩句に類似することは、夙に明の楊愼（『升菴詩話』巻八・唐詩不厭同）が指摘する所であった。程氏はこれを、「鶯鶯傳」が太原の妓女の作を本歌としたと見なすわけである。しかし、妓女の詩は『太平廣記』の「歐陽詹」故事中でも資料的價値の劣る黄璞所記部にのみ採錄されている。從って、これを根據に影響關係を論じることには愼重であるべきだろう。

拙論では、孟簡の作品を「鶯鶯傳」研究に缺かせぬ同時代資料として扱うこととする。このような立場を採っても、孟簡の「故事」が「鶯鶯傳」の本質を探る上で多大な示唆を與える作品であることに變わりはない。

さて、以上の考察は、元稹の言う「『鶯鶯傳』は若い士大夫への戀の戒めとして書いた」との「訓戒の辯」を如何に捉えるべきかを結論附けるための、言わば前提であった。果たして「訓戒の辯」は「建前」なのか。拙論なりの答えを、ここに提出しておきたい。

孟簡所記の「歐陽詹」故事が、十年來の友人を失った眞摯な悲しみに裏打ちされた作品であることは、既に確認しておいた。歐陽詹の死を悼んだ後、「序」で彼は次のように述べている。「嗚呼、男女に鍾愛するや、素より其れ死を效す。夫れ亦た蔽はざるなり。大凡時を以て斷割すれば、麗色の汨す所と爲らず、豈に是くの若からんや。」

これは、女への愛に殉じた友を衷心から悼む言葉である。曰く、女

性に對する愛情を中途で斷ち切っておけばかような悲劇は回避できたものを、と。ここだけを取り出せば、鼻につく言葉かも知れぬ。しかし、これが、友人の死を悔やみ切れぬ孟簡の、その眞情から發せられたものであることは、作品全體を讀めば明らかである。そこには若い士大夫への戒めとなさんとの意圖もあった。彼は、續く「詩」にかく言う。「大夫早に通脫せば、巧笑安んぞ能く干さん。身を防ぐは本より苦節、一たび去らば何に因りてか還らん。後生沈迷する莫れ、沈迷すれば其の眞を喪はん」と。「沈迷」とは女性への愛に溺れること、「眞」とは、士大夫の本分を指そう。

「序」と「詩」のこうした「訓戒」は、明らかに、「鶯鶯傳」に於ける張生の「尤物論」や崔氏との決別行爲、或いは元稹の「訓戒の辯」と、軌を一にするものである。しかも、孟簡は「序」に於いて「河南の穆玄道予を訪ぬるや、常に其の事を歎息せり」と言う。彼らは、歐陽詹が妓女への愛に溺れてその將來を失った事が、餘程悔しかったのである。從って、この「詩」にうたわれた、後生にその跌を踏ませまいとの心情は、紛う方なく彼らの「本音」であったと見てよい。孟簡の戒めは、「戀愛」と「婚仕」を巡る問題を切實な人生の課題としてまいた若い士大夫の胸に、強く響いたことであろう。「鶯鶯傳」もまた、この歐陽詹事件と孟簡によるその作品化から程なく、同じ時代精神の元で執筆されている。「鶯鶯傳」の讀者とは、歐陽詹事件と孟簡の作品とを既に知り、しかも、孟簡の戒めを、恐らくは無理なく受け入れていた人々なのである。つまり「鶯鶯傳」は「歐陽詹」故事と同じ讀者を對象とする。從って、彼らは元稹の「訓戒の辯」を「建前」としてではなく、より多く「本音」として享受したと思われるのである。もとより、「鶯鶯傳」と孟簡「故事」とは異なる二作品であり、同列に論じられぬ側面を持とう。しかし、兩者が同じ時代精神を背景に生み出されたこともまた事實なのである。拙論は「訓戒の辯」を元稹の「本音」と判斷するものである。

四　「訓戒の辯」――その分析――

「訓戒の辯」は元稹の「本音」である、これが、前章で得られた結論であった。「予嘗て朋會の中に於て、往往此の意に及ぶは、夫の知る者をして爲さず、之を爲すものをして惑はざらしめんとてなり。」元稹は、戀愛の禁止と、戀に惑うな、との意圖を込めて、「鶯鶯傳」を書いたと言う。だが、この彼の「本音」は、一見、當時の社會風潮や彼自身の言行と矛盾する側面を持つ。というのも、その後元稹は、白居易と共に著名な「艶詩作家」として時代に持て囃されているし、彼らの艶詩が流行したのは、私見によれば、士大夫と妓女や士女との「戀愛」がある程度容認される社會風潮が、中唐期に醸成されていたからなのである。[31]「艶詩作家」として時代の寵兒ともなった元稹が、他方で戀愛の禁止を說くのは「矛盾」なのではあるまいか。このような疑問が、「訓戒の辯」を「建前」と受け取らせる一因ともなっていよう。これを如何に捉えるべきか。先ず、當時の士大夫の戀愛觀を確認しておきたい。

中唐期の士大夫にとって、「建前」はいざ知らず、その「本音」及び生活實態を探ってみれば、科擧合格や仕官以前に既に男女關係を經驗濟みなのは、極めて一般的な狀況であった。例えば、「鶯鶯傳」「霍小玉傳」「李娃傳」等の傳奇小說。或いは白居易「寒閨夜」（卷十三）、「寄湘靈」（卷三）[32]、元稹「夢遊春七十韻」「古決絕詩三首」（共に外集卷一）等の體驗に基づく詩。これらは全て、科擧受驗や仕官以前の戀愛

を扱っている。更に「(歐陽) 生…心は專ら勤儉にして、聲色を識らず。玆に筮仕に及び、未だ洞房纖腰の蠱惑たるを知らず」(孟簡「歐陽詹」故事)、「張生…年二十三、未だ嘗て女色を近づけず。知る者これを詰る」(「鶯鶯傳」)、「(十五歲より以來)…吾京城に生長し、朋從少なからず。然ども未だ嘗て倡優の門を識らず、曾て喧嘩に縱觀せざりき。汝これを信ずるか」(『元稹集』卷三十「誨庭等書」) といった口吻。これらは、たとえ科擧合格や仕官以前であっても、青年期に達したら、男女關係を經驗しているのが當然だとの認識が、當時一般的な考え方として共有されていたことを裏附けよう。「鶯鶯傳」の冒頭で張生が誇らしげに述べる台詞「余は眞の好色者なり、…大凡物の尤なる者は、未だ嘗て心に留連せずんばあらず。是れ其の情を忘るる者に非ざるを知るなり」も、「好色」で「情を忘れない」ことが、當時、士大夫のあるべき姿として陰ながら强く支持されていたことを物語る。長い受驗勉强の期閒中、「建前」のみの生活で我慢できないのは至極當然のことではあろう。科擧受驗生はエリートで比較的裕福でもあるから、周圍の女性から好意を寄せられる場合も多かったと思われる。こうしたことから、「儒敎的建前論」とは別に、先に述べたような、經驗則による「暗默の常識」が生み出されていたとしても不思議ではあるまい。當時の士大夫は、こうした二重規範の中で生活していたわけであろう。元稹自身、「鶯鶯傳」執筆以前に、所謂「夢遊春」の戀を經驗しているのである。

「鶯鶯傳」の後半部において作者元稹は自ら登場し、「續會眞詩三十韻」を作っている。

轉面流花雪　面を轉じては花雪を流し、
登床抱綺叢　床に登りては綺叢を抱く。
鴛鴦交頸舞　鴛鴦頸を交へて舞ひ、
翡翠合歡籠　翡翠歡を合はせて籠る。
眉黛羞偏聚　眉黛羞ぢて偏に聚まり、
唇朱暖更融　唇朱暖かにして更に融く。
氣淸蘭蕊馥　氣淸くして蘭蕊馥しく、
膚潤玉肌豐　膚潤ひて玉肌豐かなり。
力無慵移腕　力無くして腕を移すに慵く、
多嬌愛斂躬　嬌多くして躬を斂むるを愛す。
汗流珠點點　汗流れて珠點點、
髮亂綠葱葱　髮亂れて綠葱葱。
方喜千年會　方に喜ぶ千年の會、
俄聞五夜窮　俄かに聞く五夜の窮まるを。

こうした性愛の描寫は、「鶯鶯傳」執筆以前に、元稹が深く女性の美に耽溺した經驗を持ち合わせていたことを豫想させる。讀者の一部には、こうした描寫をことさらに喜ぶ者もいたことであろう。[38]

縷述した資料から明らかなように、當時の士大夫が戀に禁欲的であったとはあまり言えそうにない。寧ろ、「暗默の常識」として戀を肯定するのが一般的であったようにも見える。こうした社會風潮の中で、戀愛の禁止を說き、戀に惑うなと警鐘を鳴らすことが、どれほどの效果を持ち得たであろうか。假に元稹が反時代的な人閒であったならば「訓戒の辯」も素直に「本音」と受け取り易い。しかし、彼は正に「艶詩作家」として時代に持て囃された人物なのである。

戀愛を肯定する風潮の中で戀への禁欲を說く「矛盾」を如何に捉えるか。思うに、この「矛盾」を解く方途は二つある。一つは、「訓戒の辯」を、「建前」を述べたに過ぎぬと捉える仕方。今一つは、「訓戒

の辯」を、極めて深い認識から出たものと捉えることである。即ち、そこには、元稹が自身の體驗から獲得した「戀愛の本質」への深い洞察の裏打ちがある、と捉える見方である。拙論が後者の立場を採ることは、言を俟たぬであろう。

中唐期には、前代に比して、様々な形での「戀愛」がより豐かに營まれるようになった。そうした中で、戀に關して敏感で豐かな感性を持ち合わせていた元稹が、自身の感受した「戀愛の本質」から紡ぎ出した言葉、それが、かの「訓戒の辯」なのではないか。「鶯鶯傳」が捉えた「戀愛の本質」とは何か。章を改めて檢討してみたい。

五　「尤物論」の系譜

「鶯鶯傳」の末尾、科擧受驗のため上京していた張生は、やがて、鶯鶯との交際を斷ち切ることに決めた。元稹がその胸中を尋ねたところ、張生はこう答えたと言う。

大凡天の尤物に命ずる所や、其の身に妖せざれば、必ず人に妖す。崔氏の子をして富貴に遇合し、寵嬌を秉らしめば、雲と爲らず、雨と爲らずんば、蛟と爲り螭と爲り、吾其の變化する所を知らざるなり。昔、殷の辛、周の幽、百萬の國に據り、其の勢甚だ厚し。然れども一女子之を敗り、其の衆を潰し、其の身を屠り、今に至るまで天下の僇笑と爲る。予の德以て妖孽に勝つに足らず、是を用て情を忍ぶ。

かの有名な「尤物論」である。この倫理的評價を巡って古來議論が絶えないことは、先に述べておいた。拙論は、元稹の「訓戒の辯」を「本音」と見る立場を採る。從って、この「尤物論」に關しても、基本的には作者元稹の「本音」が吐露されていると判斷する。

美人を男を惑わす尤物と見るこの思想が、「復古」意識の昂揚につれて、中唐期に至り再登場したものであることは、夙に指摘されている。[34] 殊に、貞元末期から元和初期に、元稹白居易を中心として、再提示された考え方であった。では何故、この十年に滿たぬ短期間に、こうした「尤物論」が集中的に作品化されたのか。この顯著な文學現象を支えた、この時代に特有の條件とは何か。暫く「尤物論」の系譜を辿ってみたい。

孟簡の「序」は、歐陽詹と妓女との出會いをかく述べる。「初めて太原に抵り、大將軍の宴に居る。席上に妓有り、北方の尤者なり。屢ば生に目す。生之に感悅せり」と。妓女は「北方の尤者」。「尤物」の熟語こそ使わぬが、「屢ば生に目す。生之に感悅せり」と、その尤物性はきちんと描かれている。「詩」では更に明確に言う、「太原に佳人有り、神艶行雲を照らす。座上轉た橫波、流光もて夫君に注げり。夫君意蕩漾、即日相交歡す。」即ち、妓女がその色香で、歐陽詹を惑わしたとうたうのである。妓女を「巧笑」と呼ぶ孟簡「故事」には、明らかに、張生の「尤物論」と同質の思想が包藏されている。

元和元年の冬、陳鴻は白居易から、「長恨歌」の「傳」を委囑された。彼は「長恨歌」の創作意圖を次のように解說する。「意者、但に其の事に感ずるのみならず、亦た尤物を懲し、亂階を窒ぎ、將來に垂れんと欲する者なり。」「長恨歌」には、「尤物」楊貴妃に惑うた玄宗の跌を踏むな、との後生への戒めが込められているという。陳鴻の「傳」は、白居易が委囑し「長恨歌」に附載されてもいるから、先の解說は白居易の意にも適うものと見てよい。次の新樂府「李夫人」は、そのことを證す。

元和四年、左拾遺となった白居易は、諷諭詩の大作「新樂府」五十

首を纏め上げた。「李夫人」はその内の一作。詩中、愛姫を哭す三人の天子、漢の武帝・周の穆王・唐の玄宗を擧げ、限りない慟哭の様を、こう評す。「生きても亦た惑ひ、死しても亦た惑ふ。尤物人を惑はして忘れ得ず。人は木石に非ず皆情有り。如かず傾城の色に遇はざらんには。」

この一連の「尤物論」は、孟簡「故事」こそ違へ、「鶯鶯傳」以下、『左傳』にその典據を持つ。昭公二十八年、息子の叔向が妖女夏姫の娘を娶ろうとするのに反對して、母はこう述べた。

吾之を聞く、甚だ美なるは、必ず甚だ悪なる有り。是［＝夏姫］……子貉の妹なり。貉早く死して後無く、而して天美を是に鍾めたり。將に必ず是を以て大いに敗るる有らんとするなり。……且つ（夏殷周）三代の亡び、共子［＝晉の太子申生］の廢せるは、皆是の物［＝美人］なり。……夫れ尤有る物は、以て人を移すに足れり。苟し德義に非ざれば、則ち必ず禍有り、と。

引用最後の一文は「鶯鶯傳」の「予の德以て妖孽に勝つに足らず、是を用て情を忍ぶ」と見事に響き合う。但し、「鶯鶯傳」の文は、女禍を巡る問題の一切が、最終的には人間の「情」に起因するものであることをより明確に指摘する。私見に據れば、中唐に於ける「尤物論」の最大の特徴は、この「情の重視」にある。前掲した『左傳』の「尤物論」では、明らかに、美人の害悪、卽ち「女禍」を說くことに重點があった。これに對して中唐期の「尤物論」では、その重點が「情の作用」を說く方向に傾斜しているのである。つまり、そこでは、女性の悪を說くことよりも、むしろ、「情の恐しい力」を說くことに、より關心が持たれている。例えば、「李夫人」の「人は木石に非ず皆情有り。如かず傾城の色に遇はざらんには」との慨嘆も、その基盤にあるのは、女禍の根源は情である、との認識だ。蓋し、貞元元和の移行期は、「情」の問題が、かつてないほど切實な課題として認識された時代である。この時期集中的に製作された前掲「尤物論」の作品群は、こうした「（男女の）情」への深い認識から、生み出されたのではなかったか。

「鶯鶯傳」は、「情を忘るる者に非」ざる張生が「情を忍ぶ」に至る物語だとも言えよう。この契機となったものは、鶯鶯の「自獻」行爲と上京中の張生に宛てた「手紙」であった。彼女の行爲は、戀情に突き動かされて貞女の禁を犯すに至ったものであり、その手紙には、私を棄てたなら崇ってもやろう、と書く。共に、凄まじい女の情念だ。張生はこの情念に飲み込まれることを恐れて（「予之德不足以勝妖孽」）、「情を忍」んだのである。作者元稹には、男女の情が持つ根源的な力への畏怖が、感受されていたのではないか。この點は、「鶯鶯傳」を「尤物論」作品史の流れから考察する時、より鮮明になろう。

孟簡の「故事」には、確かに、妓女を尤物と見る觀點があった。しかし、必ずしも女を悪と見ていない。「古樂府詩に『華山畿』有り。『玉臺新詠』に『廬江小吏』有り。更も相死するは、或いは此れに類するか。」二人の情死は、愛の完遂をうたった古への悲戀物語のようだという。「詩」にもまた「短生には別離すと雖も、長夜には阻難無し。雙魂終に會合し、兩劍遂に蜿蜒たらん」と、死後の世界で、二人の魂が堅く結ばれたことをうたう。ここでは、女を尤物＝悪として糾彈してはいない。孟簡「故事」は一つの事件を一人の作者が描いたものである。そこに、尤物として妓女を糾彈し、他方で、男女の愛の完遂を信じる、異なる二つの態度が生じているのは何故か。それは、より根本的なものとして、孟簡に、男女の情が持つ根源的な力への戰き

があったからであろう。彼は慨嘆する、「嗚呼、男女に鍾愛するや、素より其れ死を致す」と。先の二つの態度は、共に、情の魔力への戦きを源泉とするのである。この魂の戦きは、現實の儒家的倫理が意識された時には「尤物論」となって現れ、それが意識されぬ時には、情愛の持つ壓倒的な力への慨嘆となって現れる。これは、「長恨歌」と「長恨歌傳」との關係にも、そのまま當てはまるものだ。

「歌」「傳」兩者の内容は一見矛盾し、そこから、楊貴妃の尤物性を強調する陳鴻の「傳」は、儒者歴史家としての「建前論」であり、白居易の眞意は、愛の完遂をうたう「歌」にこそある、といった議論もしばしば見受けられる。しかし、陳鴻の「傳」は白居易が委囑したものであり、『白氏文集』にも附載されているのである。兩者の本質は、基本的に同じであると見たい。[38]「歌」に云う「但だ心をして金鈿の堅きに似しめば、天上人間會ずかならず相見ん。……天長地久盡くる時有るも、此の恨緜緜として絶ゆる期無からん」と。「傳」もまた云う「此の一念に由りて又此に居ることを得ず。復た下界に墮ち、且つ後縁を結ばん。或いは天と爲り、或いは人と爲るも、決ずかならず再び相見て、好合すること舊の如くならん」と。白居易や陳鴻が心の最奥で感受していたのは、國を傾け、生死を超越して貫徹される、男女の情の、その根源的な力への戦慄、であったろう。これは「生きても亦た惑ひ、死しても亦た惑ふ」とうたう「李夫人」にも、脈々と流れている。

元和五年、江陵に左遷された元稹は、「夢遊春七十韻」詩を作り、親友白居易に寄せた。若き日の戀人との離別を傷み、死別した妻を哭し、左遷の挫折を詠じた詩である。白居易はそれに應えて、「和夢遊春一百韻」（巻十四）詩を返した。その主意は、佛敎の敎えに從って煩惱を絶ち、色卽是空の境地を悟れ、というにある。曰く「憂惱の病を除かんと欲せば、當に禪經を取りて讀むべし。須く事の皆空なるを悟るべく、念をして將て屬［＝執着］せしむる無かれ。請ふ　遊春の夢［＝戀人との逢瀬］を思へ、此の夢　何ぞ閃倏なる。豔色は卽ち空花、浮生は乃ち焦穀」と。「序」によれば、白居易と元稹とは、「外には儒風を服し、内には梵行を宗とし」てきた。この和詩に於いて白居易が述べているのは、戀人への情とは煩惱に外ならぬ、それはあの佛の敎えによってのみ斷ち切れる、それを、元稹よ、思い起こせ、ということだ。これは、單なる「說敎」ではなかろう。詩人白居易は、煩惱の根深さ、情の力の奥深さを、身に染みて知っていたからである。元稹への和詩を書いた翌年、「夜雨」（巻十）の詩に云う。

我有所念人　隔在遠遠鄉
我有所感事　結在深深腸
鄉遠去不得　無日不瞻望
腸深解不得　無夕不思量
……

我に念ふ所の人有り、
隔たりて遠き遠き鄉に在り。
我に感ずる所の事有り、
結ばれて深き深き腸に在り。
鄉は遠くして去き得ず、
日として瞻望せざるは無し。
腸深くして解き得ず、
夕べとして思量せざるは無し。
……

不學頭陀法　前心安可忘
頭陀の法を學ばずんば、
前心　安くんぞ忘るべけん。

女への煩惱を斷ち切れぬのは、白居易とて同じなのだ。身に巢くう情の根深さを知る故に、佛の敎えに縋る。元白二首の「夢遊春」詩の基盤には、絶ち難き男女の情への、深い洞察がある。この點を、忘れてはならない。

六　おわりに

拙論に據れば、「鶯鶯傳」の本質は、これを、中唐期の「尤物論」作品史の流れに於いて考察する時、初めてその相貌を闡明できる。その本質は、男女の情が持つ根源的な力への戰きを深く感受している點にこそある。その感受は、白居易に於いて最大の深まりを見せたようだ。こうした見方は、從來の研究では、必ずしも明確にされて來なかったものである。

「鶯鶯傳」の崔氏は貞女の典型であった。反面、「善く文を屬し、往往章句を沈吟し、怨慕する者之を久しくす」る、多情な文學少女でもある。張生の寄せた「情詩」という文藝の火が、眠れる情を炎と化して、少女を「自獻」行爲に及ばせた。上京した張生に宛てては、私を娶らねば「則ち當に骨化し形銷すべけん。丹誠泯びず、風に因り露に委し、猶ほ清塵に託す」と、死靈として祟らんばかりだ。この燃え盛る「情の炎」に觸れて、「情を忘れ」ぬ張生が「情を忍ぶ」に至ったのである。元稹の腦裏には、遠くは玄宗楊貴妃の、近くは歐陽詹の事件が、殊に意識されていたであろう。共に「男女に鍾愛」した結果、「死を致」したのであった。男女の情は、人を死に至らせる程の根源的な力を持つ。「鶯鶯傳」の「尤物論」は、その最も奥深い所に、こうした洞察を秘めているのではあるまいか。それを「建前」とのみ解釋し、一蹴したのでは、「鶯鶯傳」の本質を取り逃がすことになろう。

若い士大夫への訓戒を意圖した「鶯鶯傳」は、後には、北宋・趙令時「蝶戀歌鼓子詞」に見るように、妓女との宴席などで餘興の話柄とされた。[36] 作品の「大衆化」が始まっていたのである。享受の形態がこのように變化した後では、「尤物論」の側面は影を潛めざるを得ない。「長恨歌」が、妓女等を第一受容者とするために、「尤物論」の側面が韜晦していることと、一般である［注31拙論參照］。しかし、「鶯鶯傳」や「長恨歌」は、情愛の普遍的本質を、巧まず、摑んでいた。兩者が、「中唐」の時空を越えて「根源的作品」となり得た、その所以の一端は、恐らくここに、在ったのであろう。

注

(1) 後、各影響下に成る作品は、「長恨歌」に元・白樸『梧桐雨』、清・洪昇『長生殿』等が、「鶯鶯傳」に金・董解元『西廂記諸宮調』、元曲『西廂記』等がある。

(2) 張生元稹別人説の強い主張は、内山知也「鶯々傳の構造と主題について」（『日本中國學會報』第四十二集・一九九〇年）、吳偉斌「〃張生卽元稹自寓說〃質疑」（『中州學刊』・一九八七年第二期）、同「再論張生非元稹自寓」（『貴州文史叢刊』・一九九〇年第二期）等に見える。

(3) 中國に於ける「鶯鶯傳」研究の動態は、吳在慶「近年來關于《鶯鶯傳》的討論綜述」（『社會科學動態』・一九九一年第十一期）、程國賦「《鶯鶯傳》研究綜述」（『文史知識』・一九九二年第十二期）參照。

(4) 例えば、侯忠義『中國文言小說史稿上册』（一九九〇年・北京大學出版社）等。

(5) 例えば、陳寅恪「豔詩及悼亡詩」「讀鶯鶯傳」（『元白詩箋證稿』一九七八年・上海古籍出版社、初刊一九五〇年）等。

(6) 例えば、吳偉斌「論《鶯鶯傳》」（『揚州師範學院學報』・一九九一年第一期）等。

(7) 注（2）内山論文等。

(8) 注（5）陳寅恪論文。

(9) 例えば、曾祥麟「張生不是無情種―關于元稹的《鶯鶯傳》―」（『貴州

民族學院學報』一九八九年第三期）等。

（10）小南一郎「元白文學集團の小說創作―『鶯鶯傳』を中心にして―」（『日本中國學會報』第四十七集・一九九五年）。

（11）以下、傳奇小說の引用は、汪辟疆『唐人小說』（一九七八年・上海古籍出版社）。

（12）「唐代における愛情小說の限界―「鶯鶯傳」についての私見―」（「中國文化論叢」第三號・一九九四年）。

（13）例えば、「謝小娥傳」に「知善不錄、非春秋之義也。故作傳以旌美之」と。

（14）孟簡所記部は『全唐詩』（卷四七三）にも「詠歐陽行周事并序」として收める。

（15）孟簡「序」の原文は以下の通り。「閩越之英、惟歐陽生、以能文擢第。爰始一命、食太學之祿、助成均之敎、有庸續矣。我唐貞元年己卯（十五）歲、曾獻書相府、論大事。風韻淸雅、詞旨切直。會東方軍興、府縣未暇慰薦。久之、倦遊太原、還來帝京、卒官靈臺。悲夫。生於單貧、以狗名故。心專勤儉、不識聲色。及茲筮仕、未知洞房纖腰之爲蠱惑。初抵太原、居大將軍之宴。席上有妓、北方之尤者。屢目於生。生感悅之、留賞累月、以爲燕婉之樂、盡在是矣。既而南轅、妓請同行。生曰「十目所視、不可不畏。辭焉。請待至都而來迎。」許之、乃至。生竟以蹇連、不克如約。過期、命甲遣乘、密往迎妓。妓因續室成疾、不可爲也。先夭之夕、剪其雲髻、謂侍兒曰「所歡應訪我。當以髻爲貺。」甲至得之、以乘空歸、授髻於生。生爲之慟怨、涉旬而生亦歿、則韓退之作『何蕃書』、所謂歐陽生者也。河南穆玄道訪予、常歎息其事。嗚呼、鍾愛於男女、素其效死。夫亦不蔽也。大凡以時斷割、不爲麗色所汩、豈若是乎。古樂府詩有『華山畿』、『玉臺新詠』有『廬江小吏』、更相死、或類於此。暇日、偶作詩以繼之云。」

（16）注（18）植木論文參照。尙最近の論考でも、廖淵泉・黃天柱・蔡長溪「歐陽詹」（『泉州文史』六・七輯、一九八二年・泉州市泉州歷史研究會等編）などは、史實であることを否定するが、詳しい考證を經たものではない。

（17）黃璞所記部には「登進士第、畢關試、薄遊太原。……尋除國士四門助敎、住京」と。

（18）植木久行「唐代作家新疑年錄（9）―歐陽詹・郭元振・陸羽―」（弘前大學人文學部『文經論叢』第三一卷第三號・一九九六年）。

（19）以下、韓愈の文は、馬其昶校注馬茂元整理『韓昌黎文集校注』（一九八六年・上海古籍出版社）に據る。

（20）周勳初主編『唐詩大辭典』（一九九〇年・江蘇古籍出版社）の吳汝煜氏考證に據る。

（21）淸・徐松『登科記考』（卷十二・貞元七年・林藻）參照。

（22）孟簡「詩」に云う「有客非北逐、驅馬次太原。太原有佳人、神艶照行雲。座上轉橫波、流光注夫君。夫君意蕩漾、卽日相交歡。定情非一詞、結念誓靑山。生死不變易、中誠無閒言。此爲太學徒、彼屬北府官。中夜欲相從、嚴城限軍門。白日欲同居、君畏仁人聞。忽如隴頭水、坐作東西分。驚離腸千結、滴淚眼雙昏。本達京師廻、駕期相追攀。宿約始乖阻、彼憂已纏綿。高髻若黃鸝、危鬢如玉蟬。纖手自整理、剪刀斷其根。柔情託侍兒、爲我遺所歡。所歡使者來、侍兒因復前。收淚取遺寄、深誠祈爲傳。封來贈君子、願言慰窮泉。使者廻復命、遲遲蓄悲酸。詹生喜言施、倒屣走迎門。長跪聽未畢、驚傷涕漣漣。不飮亦不食、哀心百千端。襟情一夕空、精爽且日殘。哀哉浩然氣、潰散歸化元。短生雖別離、長夜無阻難。雙魂終會合、兩劍遂蜿蜒。大夫早通脫、巧笑安能干。防身本苦節、一去何因還。後生莫沈迷、沈迷喪其眞」と。

（23）元稹「夢遊春七十韻」（外集卷一）詩の「覺來八九年」を、結婚より八九年以前と考えた場合。元稹の引用は、冀勤點校『元稹集』（一九八二年・中華書局）に據る。

(24) 孫望「鶯鶯傳事迹考」(『蝸叟雜稿』一九八二年・上海古籍出版社)(原載一九五〇年金陵、華西二大學『中國文化研究彙刊』第九卷)、吳偉斌「『鶯鶯傳』寫作時間淺探」(『南京師大學報』・一九八六年第一期)に據った場合。

(25) 卞孝萱「『鶯鶯傳』的原標題及寫作年代」(『唐代文史論叢』一九八六年・山西人民出版社)(原載『揚州師院學報』一九七八年第三期)に據った場合。

(26) 「歐陽行周文集十卷」(卷一五〇・集部・別集類三)の項に、「今觀詹之文、與李觀相上下、去愈遠甚。蓋此三人同年擧進士、皆出陸贄之門、並有名聲、其優劣未經論定、故貽孫之言如此」と。

(27) 注(10)小南論文の外、澁谷譽一郎「白居易の周邊と傳奇―語りという視點から見た傳奇―」(『白居易研究講座第二卷』平成五年・勉誠社)等參照。

(28) 唐・林寶『元和姓纂』(卷二)は「韋晤元」とする。

(29) 管見によれば、羅弘基「張生與元稹―兼論《鶯鶯傳》的主題―」(『學術交流』・一九八九年第五期)に、影響關係を否定的に捉える簡單な言及があるのみ。

(30) 程毅中『唐代小說史話』(一九九〇年・文化藝術出版社)二八八頁。

(31) 拙論「中唐における艶詩の流行と女性―元白の艶詩を中心として―」(『中國文學論集』第二四號・平成七年)參照。

(32) 以下、白居易の引用は、朱金城箋校『白居易集箋校』(一九八八年・上海古籍出版社)に據る。

(33) 白行簡撰『天地陰陽交歡大樂賦』騎鶴散人「跋」(一九一三年)は「『大樂賦』は」繪摩兒女、詞旨艶冶。蓋『雜事秘辛』『飛燕外傳』『會眞記』『遊仙窟』之流也」と述べ、「鶯鶯傳」を性愛小說の流れの中に位置づけている。

(34) 柳瀨喜代志「『復古』の詩と長恨歌傳・鶯鶯傳に見える楊貴妃の像―『尤物』という語をめぐって―」(『學術研究―總合編―』第二三號・一九七四年)。

(35) 竹村則行「「長恨歌」から『長生殿』に至る楊貴妃故事の變遷(上)」(『中國文學論集』第二四號・一九九五年)は、通行『白氏文集』(卷十二)所收「長恨歌傳」を、白居易の手が加わった改定本と考證する。

(36) 「至於倡優女子、皆能調說(鶯鶯傳の)大略。……好事君子、極飲肆歡之際、願欲一聽其說、或擧其末而忘其本、或紀其略而不及終其篇、此吾曹之所共恨者也」と。

(追記)

本論文は、神奈川大學で開催された平成八年度日本中國學會第四十八回大會に於ける口頭發表をもとにまとめたものである。